

mediopos 1

2014.12.8 ~ 2014.12.21

【神秘学ポエジー～風遊戯 第8集】

media-photo-poesie ヴァージョン

神秘学遊戯団

mediopos-1

2014.12.8



■宮沢章夫『時間のかかる読書』（河出文庫／2014.12）

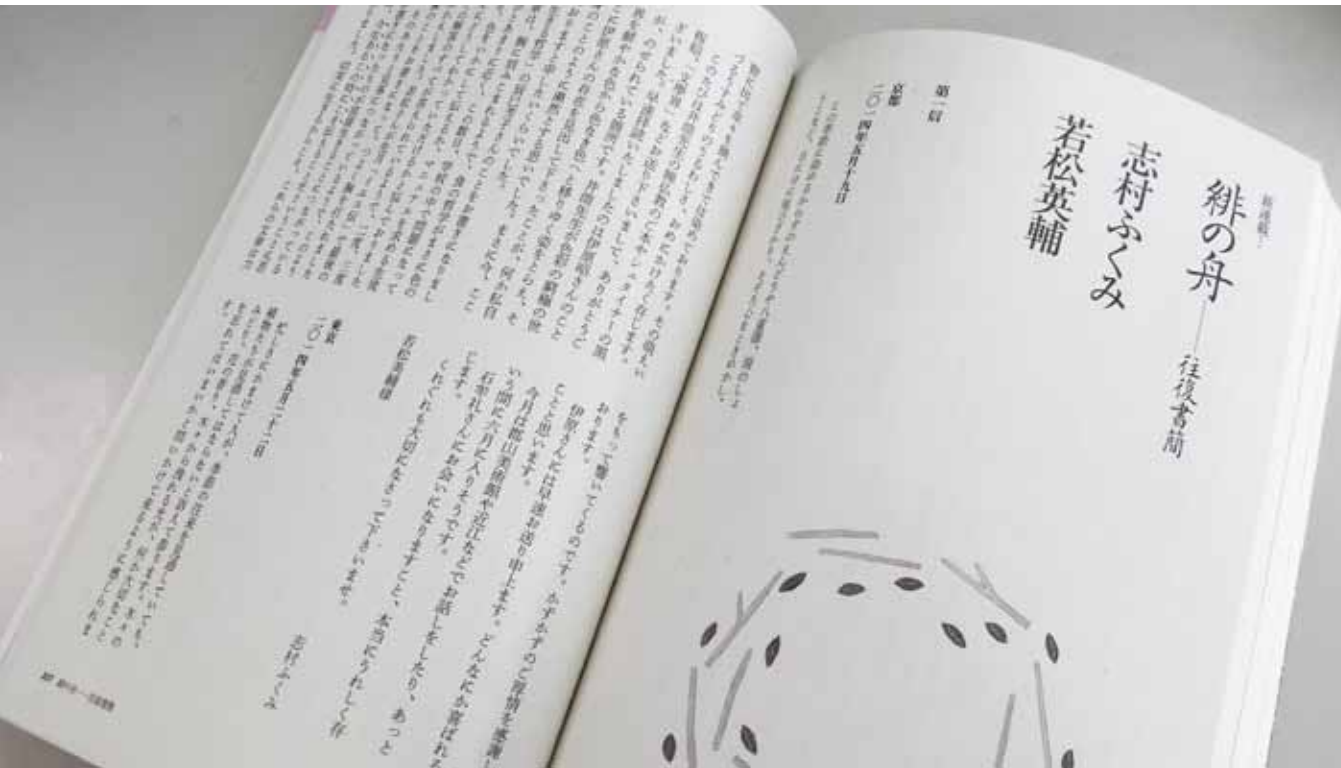
「ぐずぐずしているのだ。停滞しているのだ。そのときはじめて、もっとべつの、読みの快楽をわたしは感じていた。」

誤読の
誤読による
誤読のための
誤読

速読はいけない
答えはつまらない
教えるのはもってのほか

わからないものはわからないままに
いらぬ理屈は控えておいて
魂に美味しいものをおいしいままに

道草歓迎
寄道優先
迷路悪路を
わが道に



この舟はどこへゆくのだい
魂を死の国へと渡しているのさ
生と死の岸は遠くて近い

この光はどこへゆくのだい
闇の国へと旅しているのさ
苦しみながら色を生む

その色はどこへゆくのだい
この世を染めたその後
彼岸の国へゆくという

■志村ふくみ・若松英輔 往復書簡「緋の舟」 第一信

(「すばる 2015年1月号」所収)

「このたびは井筒先生の禅仏教のご本やシュタイナーの黒板絵、(…) などお送り下さりまして、ありがとうございました。早速拝読いたしましたのは伊原昭さんのことが、のせられている箇所です。井筒先生が色彩の究極の世界を鮮やかな色から色なき色へと移りゆく姿をとらえ、そこに伊原さんの存在を見出して下さったことが、何か私自身のことのように肅然とする思いでした。」



■アダム・テットロウ『ケルト文様の幾何学／自然のリズムを描く』（創元社／2014.10）

「ケルト人は、ドルイド教徒であれキリスト教徒であれ、洞察力に富んだ真の哲学者だった。自然を生ある存在と見なすとともに、象徴的な言語（鳥が神話の時代の人間とのコミュニケーションに使ったとされる「鳥の言語」や「緑の言語」など）で書かれた壮大な書物と考えていた。ケルト芸術に見られる正確な幾何学模様や流れるような装飾ほど、この自然観をみごとに表現しているものはない。」

川を溯っていくように
言葉の水源へ

さまざまな言葉の支流が
しだいに合わさり同じ流れとなり

人の言葉の流れも
やがて鳥や獣や虫
樹や石の言葉へと合流してゆく

そこでは数限りない言葉が
幾何学模様や装飾文様
数と形の図形で奏でられはじめる

あらゆる存在は
そのリズムとメロディから生まれ
神秘の文字となって書き記されているのだ

星は神秘文字となって輝き
鳥は神秘文字を歌い
樹は神秘文字の花を咲かせる

私もまた神秘文字となり
天と地を限りなく循環する者として
生まれ育ち歌い踊り死を迎え
やがて永遠の源へと還ってゆく



知ることはそれなりにむずかしい
知らないことを知ることはもっとむずかしい

欲を断つことはそれなりにむずかしい
欲と美しく踊るといのはもっとむずかしい

子どもであることはそれなりにむずかしい
大人であることはもっとむずかしい

戦いに勝つことはそれなりにむずかしい
戦わないでいることはもっとむずかしい

議論することはそれなりにむずかしい
議論に品性をもたらすことはもっとむずかしい

言葉を操ることはそれなりにむずかしい
沈黙で語ることはもっとむずかしい

■平川克美『復路の哲学』（夜間飛行／2014.11）

「人が知識を積んで、ひとつの高みにまでそれを突き詰めることは、だれにとってもおおよびがたいことだと思わせるものがあるだろうが、それは人が知識というものを獲得していく自然な過程に過ぎない。人生のさまざまな局面での判断力や、胆力といったものに関していえば、この知識の高みに到達したものと、知識とは無縁の生活者との間にはどんな隔たりもない。

もし、知識というものが指南力を発揮するとするならば、この知識を獲得したものがもう一度世俗の世界に降りてきて、知識の無効性を知ることにおいてなのである。」

mediopos-5
2014.12.10

カタチにはわけがある
悲しい顔にもわけがあるように

けれどもカタチにしばられる必要はないだろう
いつまでも悲しんでいる必要はないように

愉快でなくても笑ってみると
そのカタチが愉快をつれてくることだってある

いろんなカタチを遊んでみる
するとそれが別のカタチをつれてくる

アルファベットの26文字を組み合わせれば
数えきれないほどの言葉が作りだせるように

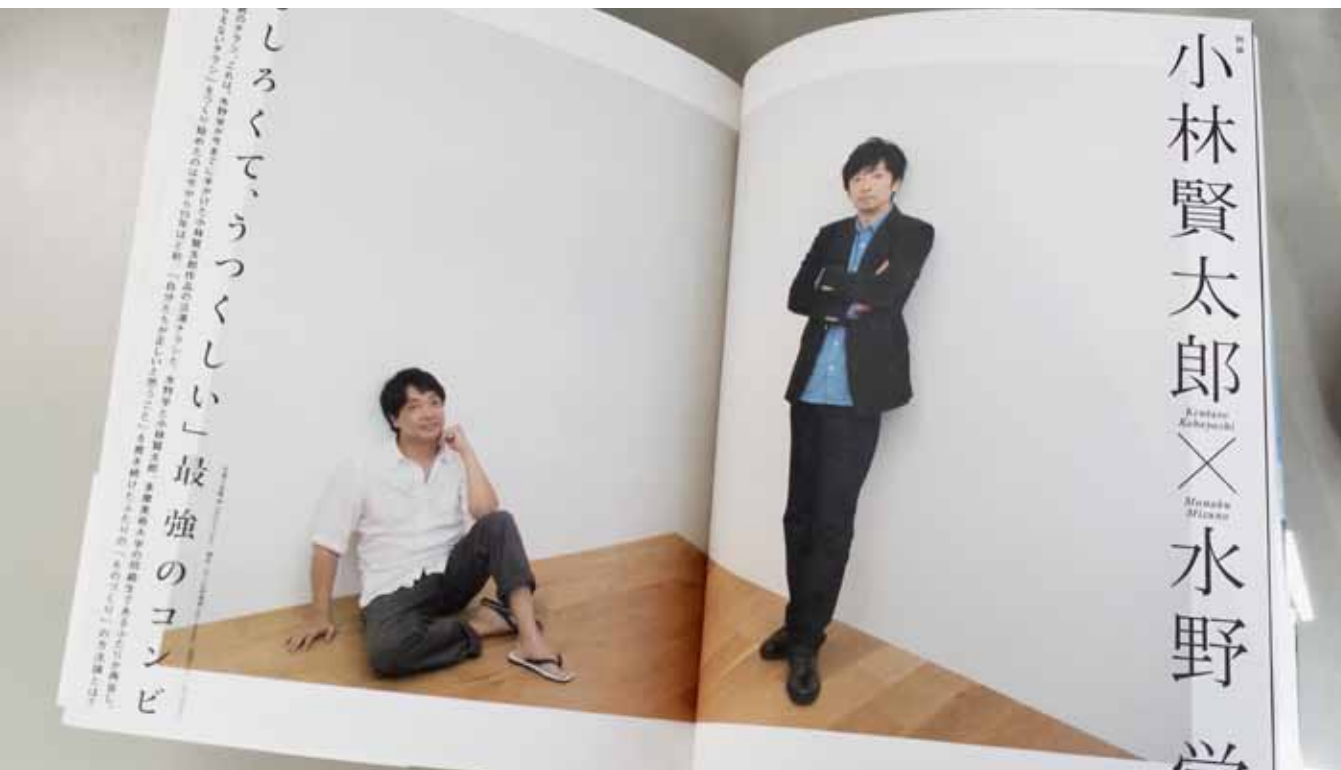
カタチとカタチの組み合わせのなかから
新しい何かが生まれてくることもあるのだから

私のカタチにもわけがあるだろう
けれど私のカタチよ自在であれ！

■クリストファー・ウィリアムズ『かたちの理由／自然のもの、人工のもの。何がかたちを決め、変えるのか』（ビー・エヌ・エス新社／2014.10）

「物質界のすべての物は――木や山、我々が座る椅子も――鉄、蒼鉛、金、リチウム、タングステンなど100足らずの要素から形づくられている。それらの要素は組み合わせられ、また新たに組み合わせられて、ほぼ無限の基本物質を作り出す。（…）ちょうど英語の26文字のアルファベットから意味のある単語や文章や思考が作り出されるのと同じように、自然の理法に従って物質界のそれらの要素から意味のある形が作り出されるのである。従って、言語であれ物体であれ、いくつかのものが最もうまく組み合わせられる方法を理解することは極めて重要だ。」





ただの変な人になるのはやさしい
普通でいられる人が変な人になるのがおもしろい

ただの愚か者になるのはやさしい
普通でいられる人が愚か者になるのが楽しい

ただの熱狂者になるのはやさしい
普通でいられる人が熱狂者になるのが頼もしい

■ 『good design company 水野学』 (デザインノート編集部・編/誠文堂新光社 2014.8)

「水野/僕は、「普通じゃないと変なことにはできない」と思ってる。

小林/でもまあ、実は世の中に普通の人なんていないのかもしれない。日本人、総変です(笑)。何が普通なのかを捉えることは、すごくむずかしいことなのかもしれない。でも、そこを僕たちはさぼっていない。」

mediopos-7
2014.12.11

泣いて生まれて祝われて
笑って死んで悼まれる
とかくこの世は生きにくい

生きて臨終
死んで臨終
臨終ならば生きてうち

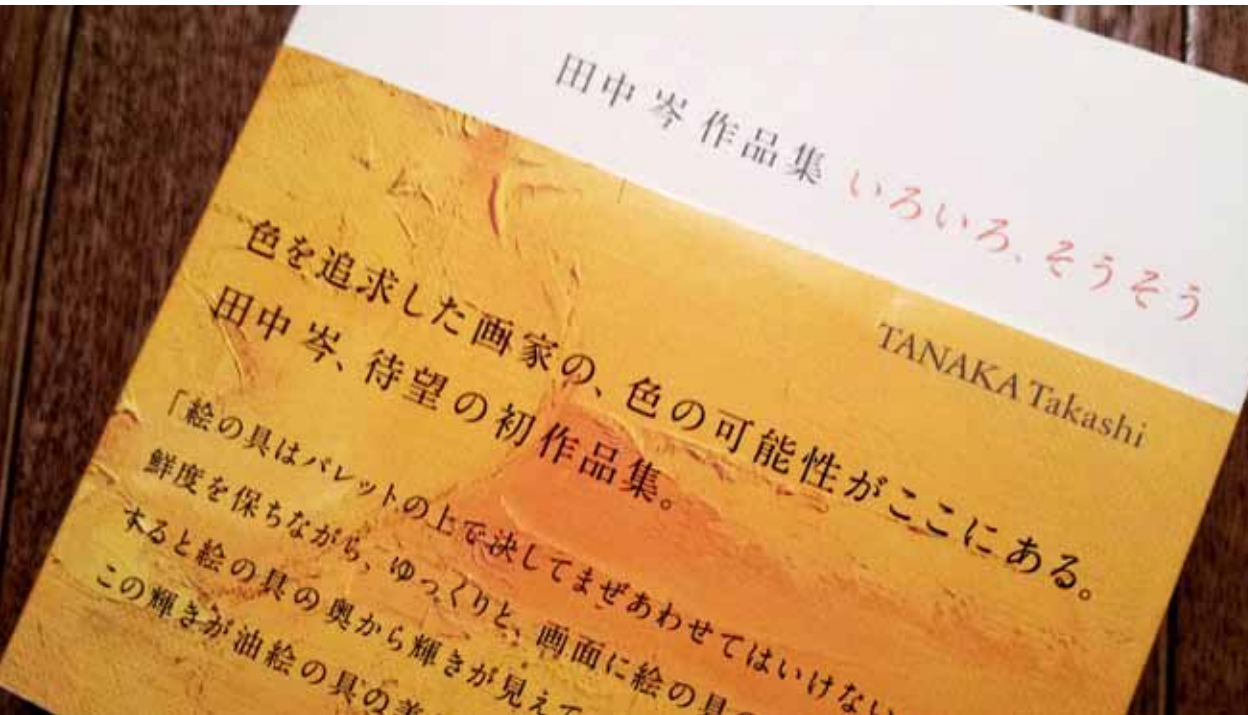
わたしゃ生きていたろうか
わたしゃ死んでいたろうか
そんなことなかまやせぬ

往って還ってまた往って
わたしゃあなたのそばがよい
いつもあなたをまつばかり

■塚田幸三『妙好人とシュタイナー』（大法輪閣 2014.11）

「へいぜい（平生）に、りん十すんで、そをしき（葬式）すんで、わたしや、あなたを、まつばかり」（才市）「平生に臨終が済むということは、いわゆる「平生業成」のことで、「臨終業成」に対して、臨終を待たずに往生できる身と定まるということです。臨終業成における臨終は肉体の死にかかわっていますが、平生業成における臨終は肉体の死とは別のことです。（…）才市の立場における今が臨終ということは、主体の死と蘇りを示すものと考えられます。「わたし」とは今死んで今甦る存在です。」





■『田中岑作品集 いろいろ、そうそう』（求龍堂 2014.9）

「私は、情景を記憶と呼んでいる。／私の見たものを、私はもう一度、ひっくりかえして見てみる。私は情景をひっくりかえして見る。記憶をひっくりかえして見る。／重ねた絵具をかきとってみる単純作業に似ていないだろうか。／私は<空虚な空間>に惹かれて絵具を重ねているらしい。」

見えているものは見えていない
見るためには見ることを重ねなければならない
重ねていくことで見えているものを虚数化していくのだ
すると見えていないものが輝いてくる

聴こえているものは聴こえていない
聴くためには聴くことを重ねなければならない
重ねていくことで聴こえているものを虚数化していくのだ
すると聴こえていないものが響いてくる

記憶は何も記憶していない
記憶するためには記憶の奥へと向かわねばならない
奥へと向かうことで記憶を虚数化していくのだ
すると記憶にないものが存在化してくる

私であるものは私ではない
私であるためには私を重ねなければならない
重ねていくことで私であるものを虚数化していくのだ
すると私ではないものが私を歌い始める



mediopos-9 2014.12.12

崇高な白は幻である
白は黒によって崇高な白を響かせる

美しさを見るためには
ときに気高いまでの醜さを必要とする

光を見ることはできない
光はさえぎられてはじめてそれを見せる

私はここにおいて私を知らない
私はさえぎられてはじめて私を知る

世界はなぜあるのか
世界は問われてはじめてその姿を開示する

■『舟越保武全随筆集 巨岩と花びら ほか』（求龍堂 2012.5）

「デッサンをしているときに、私がにらんでいる画紙の白さの奥の方に、もうひとつの白い世界が見えたのだ。画紙が白いのは当たり前なのだが、私がこの時画紙の奥に見ている白さは、他に比べようもなく澄んだ、気品のある白さなのだ。最高の白さなのだ。この白さの上に、木炭なり、コンテナりで私が線を引けば、その瞬間黒い線の周囲がまた変化して白さを増す。この白さとは一体何なのだろうか。／白い画紙に現れる白い光。しかしこの白い美しい光はある時突然私に見えなくなった。」

「無数の黒い線の間にも光る白い幻を見て心打たれたのは二十年以上も前のことであつたらう。白い輝きは私の奥深くに入り込んでしまって私の秘密の一つになっていた。（…）この秘密は私だけのもの、それを私が楽しむためには、白い画紙の上に黒い線の錯綜したデッサンを用意しなければならない。（…）私の切望する高雅が白い光線と再会するための努力。（…）私画紙に向かって黒い線を走らせるだけでよいのだ。その時、私の待つ白い光は線の間にも輝いて現れるだろう。私は生命に代えても得たいとのぞむもの、私にとっては美の極致とも思えるあの白い光が黒い線の間にも現れて、私の胸の中の弦とひびき合って崇高な音を響かせるのにちがいない。」



mediopos-10

2014.12.12

ひとつひとつ
できることをする

ひとのできることと
じぶんのできことはちがう

ひとがしたいことと
じぶんのしたいこともたぶんちがっている

したいことがあれば
できるようになるまでひとつひとつ

なんどうまれかわってでも
できるようになるまでひとつひとつ

じぶんにあったすんぼうのふくをきて
じぶんにぴったりのさいずのくつをはく

おおきくなったら
そだったぶんだけおおきくする

いきたいところがあれば
いっばいっばあるいていく

じぶんのあしで
いっばいっばあるいていく

■『守一のいる場所 熊谷守一』（求龍堂 2014.9）

「いくら時代が進んだっていても、結局、自分自身を失っては何にもなりません。／自分にできないことを、世の中に合わせたってどうしようもない。川に落ちて流されるのと同じことで、何にもならない。」

mediopos-11
2014.12.13



■山本貴光『文体の科学』（新潮社 2014.11）

「記号を使って表現された数式は、そうしようと思えばすべて普通のことばで書き表すことができる。事実、古代エジプト、古代バビロニア、古代中国から伝存する数字を記したパピルスや粘土板や紙片には、いまなら数式で方程式として書き表す計算を、延々と文章で書き綴ったものがある。古代インドではサンスクリットを用いて、詩の文体で数学が書かれた。また、現代においても数学や科学の論文は、もちろん数式を含む文章で記されている。ただし、記号を使わずにことばで記したからといって、理解が容易になるかどうかはまた別の話である。」

「私たちはいつの頃からか知というものを、「文系」「理系」と二分して捉える発想に馴染んできた。いや、いささか馴染みすぎてしまったのではないかと思う。しかし、ここでその一端を見直してみたように、一見すると抽象の極北に見える数式に象徴された「理」といえども、その記述は「文」によるほかはない。最も文から遠い印象さえある数式でさえも、本を正せば文章である。」

むずかしいことを
むずかしく書くのはやさしい
わからないことだけはわかるからだ

むずかしいことを
カンタンに書くのはむずかしい
わからないのにわかった気にさせてしまうからだ

わかりやすさを求めているのに
わかりにくくなることだってある

わざとわかりにくく書いているけれど
見え透いてしまうことだってある

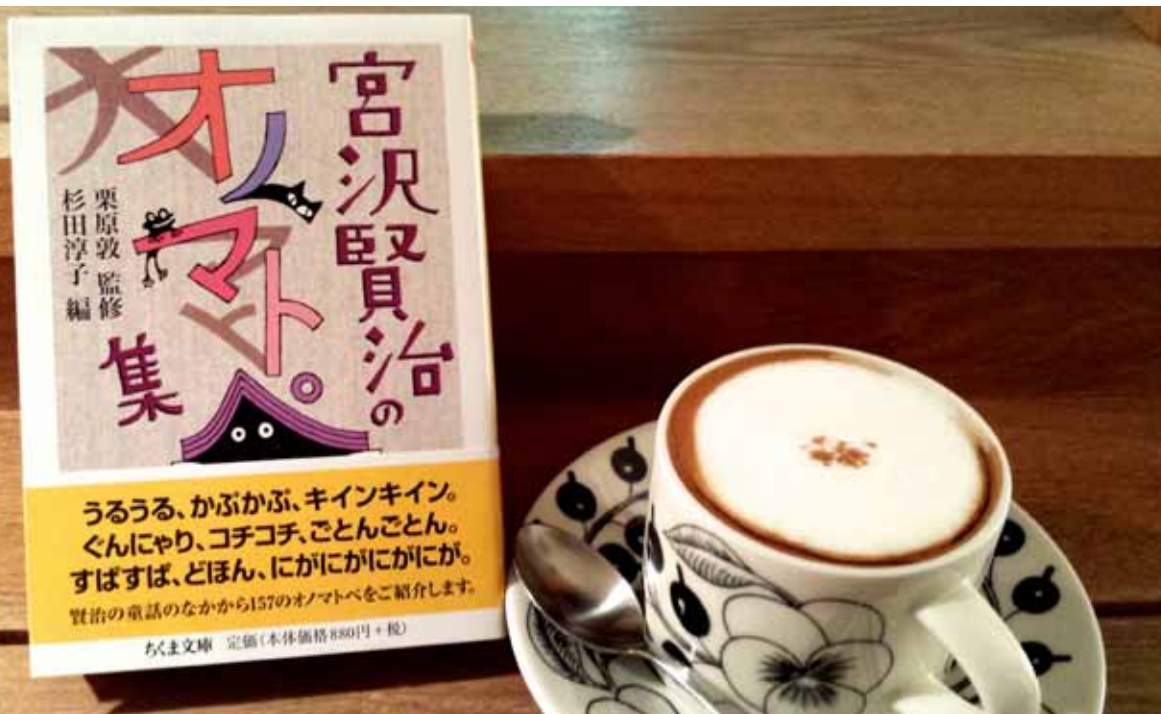
話せば話すほど伝わらないこともあり
寡黙だから伝わることもある

わたしはたった一行の短い数式が
宇宙の謎を解き明かしてくれることを夢み

まったくの沈黙のうちに
宇宙の神秘が開示されることを夢見る

けれど世界はその夢とは反対に
虚しいまでに夥しい言葉のなかで溺れているように見える
堂々巡りする言葉をぶつけ合うことさえ拒まないで

mediopos-12
2014.12.13



うれしいときは
かららんかららんと
わらってすごし

かなしいときは
きゅろきゅろと
なみだをなだし

はらがたったら
ぼすぼすぼすと
あしをならして

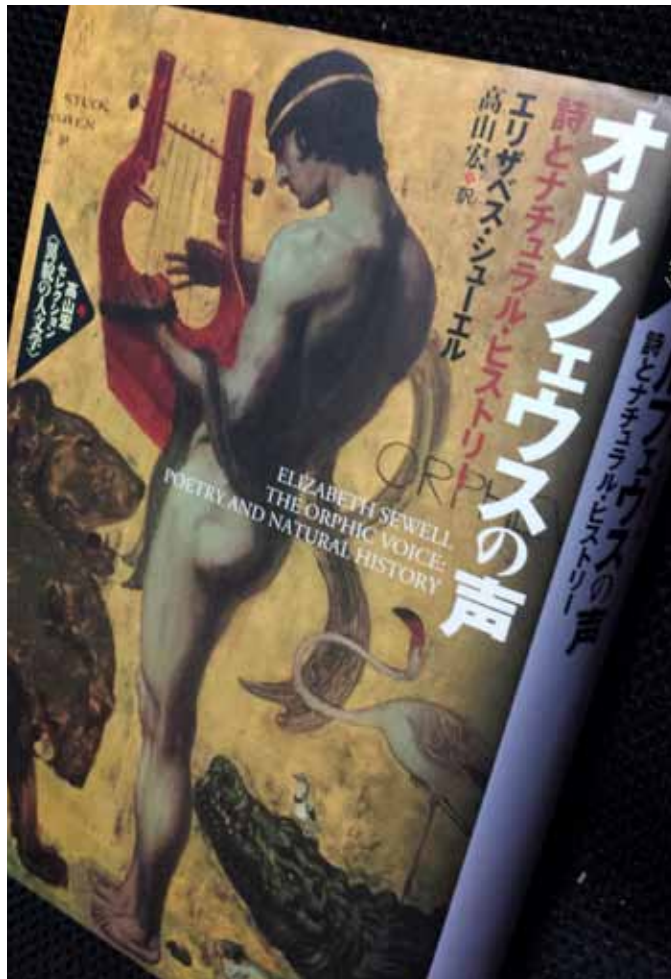
まっすぐなみちは
しゅーいしゅーい
まがったみちは
けによーっとすすむ

きょうは
あたまのなかが
ぼろろんぼろらんだから
うたでもうたって
ばららんばららんおどろうか

■栗原敦監修・杉田淳子編『宮澤賢治のオノマトペ集』（ちくま文庫 2014.12）

「宮澤賢治が、多様な現れを見せる天然自然との一体感を深めつつ外界と内界の照応を見つめながら、他方で、自然科学の徒として、対象の認識において、フィールドワークによる調査と資料の収集、そして物質の観察や分析、化学実験、科学技術的な実証などに携わったことは、もう一つの重要な側面を構成することにつながったと思われます。

すなわち、それは表現すべき対象や認識を、その実情に即して、詳細に、リアルに描き出すことに結びつき、オノマトペにおいても微妙な違いを、見事に描き分けることになったのです。」



mediopos-13 2014.12.14

語りえぬものについては
沈黙しなければならぬ

ならば詠えぬものについても
沈黙しなければならぬのか

かつて詩は樹を石を動かし
獣たちをも鎮めたという

その詩をもって
冥界へさえも赴いたという

八つ裂きにされたオルフェウス
頭部だけになっても予言を続けたオルフェウス

■エリザベス・シューエル『オルフェウスの声／詩とナチュラル・ヒストリー』（高山宏訳／白水社 2014.10

「詩は力の一形式である。その力を目に見えるもの、人間のものとしようと昔から考えられたのであり、この可視化、この人間化こそオルフェウスの物語に他ならない。／物語は（…）三つの部分に分かれる。まずその声をもって木石を動かし、野獣をおとなしくさせるオルフェウスがいて、そこではおのずから音楽が言語と詩に結びついている。次に妻エウリュディケーに先立たれたオルフェウスは亡妻をさがしに冥界に降り、その詩の力をもって冥府入りを許され望みを聞き届けてもらうが、約定に背いて地獄の出口で思わず振り向いてしまい、妻を喪う。そして第三にバッキーの狂女たちに八つ裂きにされたオルフェウスの頭部が、オウィディウスによれば重々の飴を返しながらなお歌いつつ、川面を降っていく。（…）／オルフェウスの頭部はさる洞穴に流れつくと、昼となく夜となく予言を続けるので、アポロンが命じて黙らせなければならなくなる。琴は天に上げられて琴座となった。」

* 「語りえぬものについては 沈黙しなければならぬ」（ウイトゲンシュタイン）



■安藤礼二『折口信夫』（講談社 2014.11）

「神」の問題についても、折口は、人間的な「祖霊」ではなく、森羅万象のあらゆるものに聖なる靈魂を賦与し、聖なる言葉を賦与する根源的な存在を求めていた。神の聖なる言葉とは自然のもつ力そのもののことである。さまざまな靈魂を互いにむすび合わせ、自然のもつ諸力を互いにむすび合わせ、あらゆる生命を発生させる「産霊」が、折口が最終的にたどり着いた「神」の姿である。マレビトを生涯認めることのなかった柳田國男は、第二次大戦後に折口が正面から主張するようになる「産霊」に対しても、きわめて否定的な見解を抱いていた。柳田國男が最終的にたどり着いた人間のかつ人格的な靈魂を一つに融合する「祖霊」に比して、森羅万象あらゆるものに靈魂を賦与し生命を発生させる折口信夫の「産霊」は、あまりにも非人間のかつ非人格的な存在だった。／折口信夫は、キリスト教徒のもつ超越の論理に関しても、神道のもつ内在の論理に関しても、さらには両者を矛盾するがまま一つにつなぎ合わせる仏教の禪、鈴木大拙が『金剛經』に見出した「即非」の論理に関しても、十分な理解をもっていた。超越と内在を、すなわち彼方の普遍的な神と此方の固有の私を、矛盾するがまま一つにつなく。だがしかし、折口は、非連続が連続となるそうした両義的な場を、一つの神学として抽象的に思考したのではない。より具体的に、人々の生活の場のなかに探っていたのである。柳田國男の民俗学はその導きの糸となった。人々は、祝祭の場で、天上の神を地上に招く。超越と内在を、自らの手で創り上げた神の「標山」および神の「依代」によって、一つにつなぎ合わせている。超越は、具体的な「もの」を媒介として内在に転化する。」

ものをつくる

祈りだす

言を祝（ほ）ぐ

霊（たま）が依る

神が人へ

人が神へ

聖霊がむすぶ

万象が詠う

天と地がむすばれる

ものが詠いだす

人の手が神の手に

神の手が人の手に

ものをつくる

祈りだす



■吉本隆明<未収録>講演集<1>『日本的なものとはなにか』(筑摩書房 2014.12)

「例えば『日本的なもの』を示すとして、こういうコップでも、茶碗でもいいですが、いい茶碗をつくろうと思って、土をこねて、こねながら一生を使い果たしたという人は今でもいますし、昔もいました。／そういうことを日本人はできるのです。具象物といいますか、具体物をいじくって、美的にいいものをつくる。<あいつは土をこねて一生をつぶしたのか>ということになるわけですが、そういう人からしばしば日本で偉大な人がでてきます。／だけどスピノザじゃないですが、2+2がどうして4になるのかを考えて一生をつぶしたというのは、多分日本人にはいないのです。つまりあまり得意じゃないのです。(…) インド=ヨーロッパ語的にいえば、2+2はどうして4なのかということを考えぬくことがなければ、抽象的な学問とか、抽象的から発した科学的考え方みたいなのはでてくるはずはないわけです。」

ものは詠うだろう
わたしの手とともに
わたしの息とともに

ものは悲しむだろう
わたしの胸とともに
わたしの腹とともに

ものは祈りとなるだろう
すでにだれの祈りでもなく
産霊(むす)ばれてゆきながら

数は詠うだろう
どこにもないあらゆる場所で
原初のアイデアとともに

数は育つだろう
過去でも未来でもない
時間の持続のなかで

数は祈りとなるだろう
すでにだれの祈りでもなく
永遠の幾何学を響かせながら



mediopos-16

2014.12.16

いつもはじめてのように
その青のなかで弾みたい

いつもはじめてのように
この手を空にのぼしたい

いつもはじめてのように
この足でかけまわりたい

いつもはじめてのように
いつもはじめてのように
あなたに出会っていたい

■ジェームズ・モーガン『マティスを追いかけて』（アスペクト 2006.6）

「われわれが日常見ているものはすべて、多かれ少なかれ、それまでの人生で身につけてしまった習慣によって、ゆがめられている」——1953年のマティスの言葉だ。「しかも、われわれの生きているこの時代、つまり映画のポスターや雑誌などから、既成のイメージが洪水のように押し寄せてくるこの時代には、目で見えたものがつぎつぎとわれわれの脳に先入観を植えつけてゆく。ゆがみのないまっすぐな目で見るとするには、ある種の勇気が必要だが、その勇気こそが、画家にとって命ともいえるべき大切なものなのだ。すべての事物を、あたかも初めて見るかのように、それもおさない子どもの視線で見つめること。その力を失えば、画家は、独創的・個性的な方法で自分を表現することが、もはやできなくなってしまう」



■佐々木正人『レイアウトの法則／アートとアフォーダンス』（春秋社 2003.7）

「レイアウトというのは周囲にある具体のことである。／例えば店頭で魚や野菜や果物の肌理を見る。対面した人の黒眼と白眼の比率を見る。歩く人の脚の振れ具合を見る。異性を見る。朝、歩きはじめにその日の体調を感じる。部屋を見回して掃除しようと思う。鏡で頭を見て散髪に行く。散歩して方々の曲がり具合の向こうをのぞく。そのような時に知覚していることは、すべてレイアウトである。レイアウトが特定している意味は周囲のどこにでもある。／一言でいえばレイアウトとは生きていくための知識である。」

「レイアウトを発見した男の名前をジェームス・ギブソンという。知覚心理学者の彼は、周囲の表面をレイアウトにしている自然の原理を「表面の生態学的法則」とよんだ。これは世界をわずかの原理で説明しつくすための法則ではない。世界の無限な多様性を、全面的に肯定して、日々黙々と働いている私たちの知識の原理を表す法則である。レイアウトの法則は、環境に近い法則である。（…）／アートは既に幾つものレイアウトの法則を知っている。」

目を閉じても
見ることは閉じられてはいない

耳を塞いでも
聴くことはふさがれてはいない

私のまわりにあるレイアウトは
私のなかですでに私をつくっている

私とあなたのレイアウトは違っているだろう
私とあなたのなかにある異なったレイアウトが
同じものを別のものに見せることだってある

何を見ているのか
何を聴いているのか

私の法則とあなたの法則と
そして私とあなたの法則と



だいじなものをなくしたこと
それさえも忘れてしまっていること
どちらが悲しいでしょうか

どんなことも決して忘れない薬
どんなことも忘れてしまう薬
どちらが人を幸せにできるでしょうか

■クラフト・エヴィング商會『どこかに○いってしまった○ものたち』（筑摩書房 1997.6）

「この平成の世に「不思議」を商うのは、非常に困難なことです。思えばこの百年は「不思議」を消費し続け、葬り続けた世紀でもありました。もしかするとこれらの不在品も、現物を確認してしまったら「なあんだ」というようなものであるかもしれません。（…）／ところで、これを読んで下さる方たちの中にも、それぞれの「どこかにいってしまったものたち」があるかと思います。それらの多くは、たとえば押入れのずっと奥に「あったはず」なのに、いつからか「どこかにいってしまった」のではありませんか？」



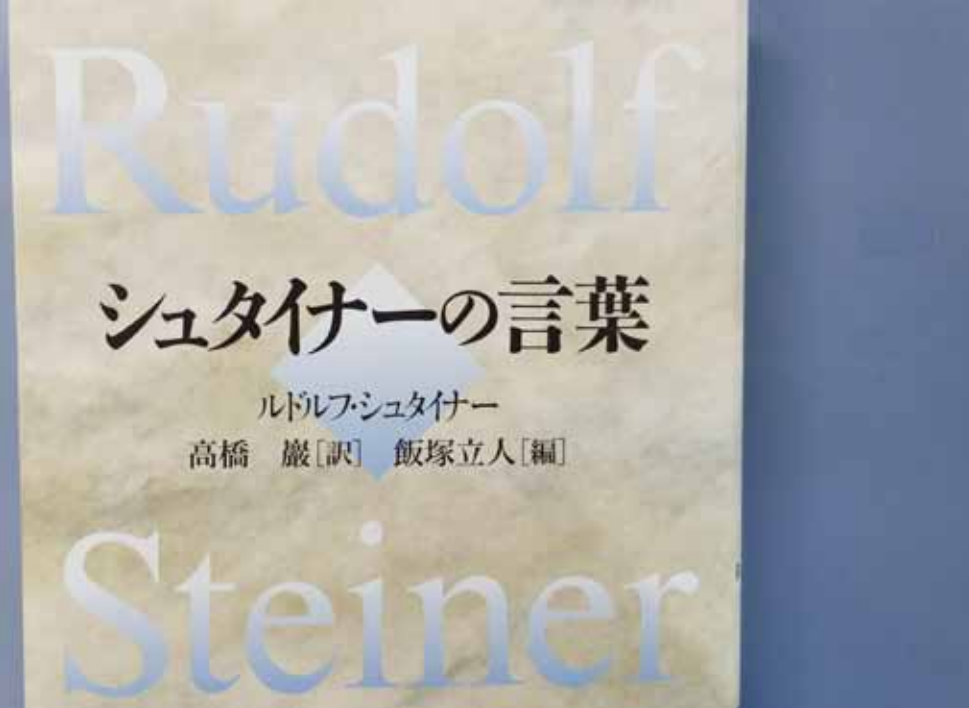
見えない自分を見るために
風はみずからが形づくるものへと向かい
光はみずからを遮るものへと向かう

私もほんとうは目には見えないから
歩いたり話したり歌ったりを
からだの化石のなかで遊んでいる

あなたも目には見えないけれど
私はあなたの生きた美しい化石とともに
しなやかに軽やかに戯れていた
そう願うのだ

■高瀬省三『風の化石』（筑摩書房 2002.8）

「『風の化石』——これが出発点だった。嵐のあと流れついた木を持ち帰り、ずうっと眺めていたときには、アザラシに見えていたものだ。それがあるとき、向きをちょっと変えてみると、ふっと目や顔が浮かびあがった。流木そのものを活かすため、最小限にしか手を加えていないが、見る角度によって、さまざまな表情を見せてくれる。」



■ 『シュタイナーの言葉』(高橋巖訳・飯塚立人編/春秋社 2014.12)

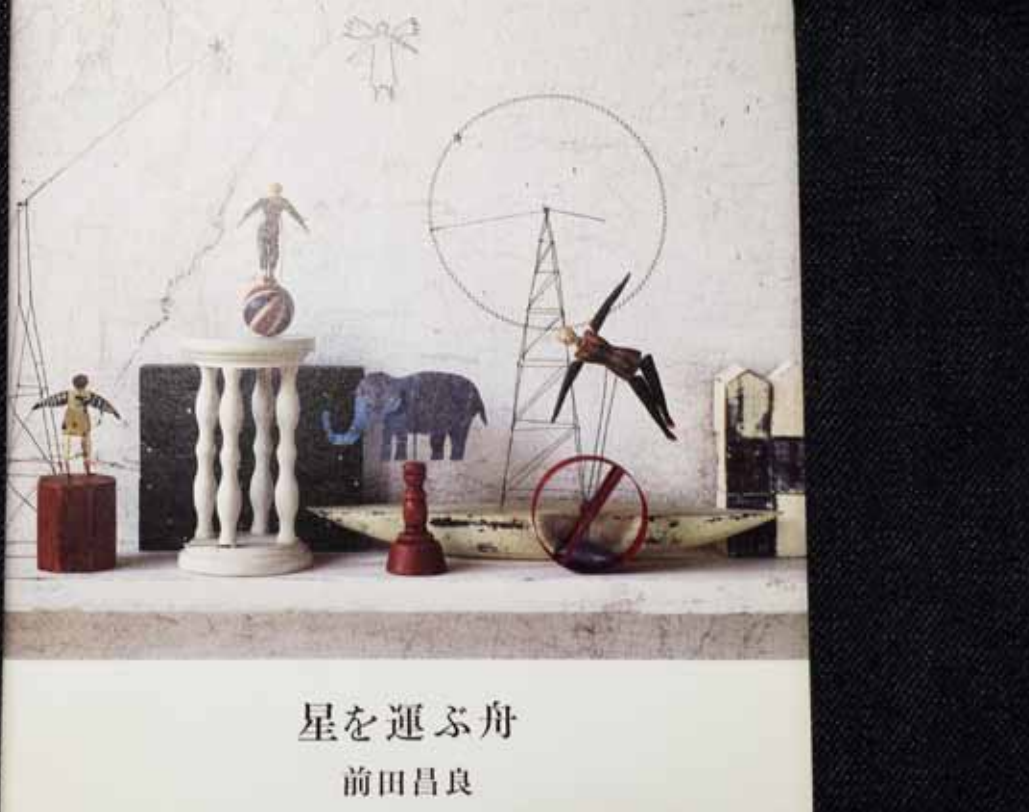
「根元の自我よ／お前からすべてがはじまる／根元の自我よ／お前のもとにすべてがかえる／根元の自我よ
／お前は私の中に生きている――／私はお前のもとにまで いたろうと努める」

無私になるためには
私をもたねばならない

種はみずからを無にして
芽をだし葉をつけ花咲き
やがて稔りをもたらし
新たな種を生む

私は永遠から生まれ
永遠へと還っていく
その往還のなかで
私は無数に変容する

1が2となり3となる
3は1となり2ともなる
無数の私よ 無私の私よ
無常と永遠を変転する私よ



ぼくらがいろんな工夫をして
跳んだり跳ねたり演じたり
詩をつくったり歌を歌ったりするのは
思いを届けるのがむずかしいからだ

そんな工夫がまるでいらなくて
思いがそのまま届けられるとしたら
空に行く舟の軌跡も星のきらめきも
目に入らなくなってしまうかもしれない

すれちがいゆきちがい
誤解が生まれいさかひも起こり
そんなだからこそ
ぼくらはいろんな曲芸さえ試みる

空中ブランコ 綱渡り 曲乗りと
伝えるための芸を身につける
なんとかして思いを届けようと
ときには道化の顔さえしながら

■前田昌良『星を運ぶ舟』（求龍堂 2011.11）

「“思いを届ける”。この単純なことがなんと難しいことか。便利な世の中だからこそ難しいのかもしれませんが。言えないことのなかにこそ伝えたいことがあるのかもしれません。たぶん僕たちが心静かに、謙虚に、澄んだ眼差しで夜空を眺めれば、そこに、空に行く舟のたくさんの航跡と、その動きに沿って移動する微かに光る小さな星の煌めきを見つけることはそんなに難しいことではないはずです。」



mediopos-22 2014.12.19

悩みがなにかを問えば
その人のことがわかる

関心のあることを問えば
その人のいる場所がわかる

恐れていることを問えば
その人の壁が見える

私のいる世界はちっぽけで
そこにいるわたしもひどくちっぽけだ

せめてときおりはそんな自分を
笑いのめしてみることにする

■中谷宇吉郎『寺田寅彦 わが師の回想』（講談社学術文庫 2014.11）

「ちょうどあの地震の時に、先生は二科展へ行っておかれた。津田青楓さんと喫茶店で休んでいると、突然地震があった。「大分大きいので、すぐこれは大変だと思ったね。部屋の天井の隅のところが、柱がくっついたり離れたりするので、こういう木造建築では駄目だと思ったよ。やっとおさまって気が付いてみたら、誰もほかのお客がいなくてね、皆機敏に逃げ出しているのさ、ボーイもないので、やっと呼び返して金を払って帰ったが、あのボーイはきっと間抜けな爺いだと思っていただろうね」という話なのである。先生には生命の危惧よりも、家屋の振動状態の方がもっと関心事だったのである。地震に対する恐怖などというのは、感覚的なものであるが、先生の自然現象に対する興味は、感覚の域にまで達していたのであろう。」



■笹公人編『出口王仁三郎歌集』（太陽出版 2013.12）

「親猫をわすれたらし吾が膝にこころおきなくねむる仔猫は／ひねもすを厩につなぐ牛の仔を夕べ放てば
よろこびはしるも／一匹の蛆虫にも神の精霊の働きを感じてゐる／動物や自然のみならず一匹の蛆虫にま
で、生きとし生けるものすべてに魂や神の働きを認めていた王仁三郎は、この世に存在するすべてのものを
愛おしく感じていたに違いない。／あまり小さい事は考えぬがよいだろう廣大無辺の宇宙の中で／ギヤツと
生まれるなり墓場に急ぐ人生だと思へば力が落ちる／王仁三郎の歌を詠んでいると、不思議と明るい気分にな
れる。「天才バカボン」ではないが、「これでいいのだ」という気持ちになって元気が湧いてくる。そんな
感想を抱くのは、矛盾を矛盾のまま受け入れ、それを臆することなく開陳する王仁三郎の堂々たる姿勢によ
るものかもしれない。」

小さいことばかり考えると
どんどん小さくなるぞ

矛盾ばかりにこだわると
ますます矛盾だらけになってしまう

どちらが先でも後でもかまやせぬ
どちらが偉かろうが牡蠣の鼻たれ

矛盾なんぞはまるごと呑みこんで
ただ笑っていればこともなし

廣大無辺の宇宙のまえで
小さいことにかわりなし

小さいけれどわが宇宙
廣大宇宙と照らしあう

神も遊ぶが私も遊ぶ
同じ遊ぶにかわりはないぞ



ひとりであゆむ
ひとりのために
すべてのひとりのために

ひとりで問う
ひとりで考える
すべてのひとりのために

ひとりで祈る
ひとりで捧ぐ
すべてのひとりのために

■中島岳志・若松英輔『現代の超克』（ミシマ社 2014.8）

（中島）「ガンディーもやはり「ウォーク・アローン」と言いました。ガンディーほど他者との共同性を重視した人はいません。彼はインドの伝統的な共同性に回帰せよといいました。自分は顔の見える範囲で奉仕することができるのであって、具体的な人間のフェイス・トゥ・フェイスの関係性とそこでの相互扶助の世界を重視しました。なのに彼はひとりで歩めと言います。そして、それはまったく矛盾していません。／親鸞が『歎異抄』の中で唯円に対して「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」というのも同じです。親鸞ほど民衆と一緒に歩もうとした人はいない。非僧非俗という立場をとりながら、寺に籠もらず、農民の苦しみに寄り添った。その親鸞が「親鸞一人」というわけです。」

*河上徹太郎ほか／竹内好『近代の超克』（富山房百科文庫 1979.2）

mediopos-25
2014.12.21

智慧を得ようとして
争うことはできない
奪うこともできない
奪われることもない

智慧は開かれている
隠されることもない
ただ自由において
自ら歩まねばならない

智慧は時空を超えている
けれどいまここに偏在している
気づかねば近づくことはできない
気づけばただ目を開けるだけ



■植木雅俊『仏教学者 中村元』（角川選書 平成 26 年 7 月）

「西洋において平等は、フランス革命の標語の一つに掲げられていたように、権利のための闘争を通じて表れた観念であった。それに対して、仏教の平等論は、労働や、教育、財産などに関する社会的権利の主張として論じられたのではなく、一人ひとりが「法」（真理）に基づいて「真の自己」に目覚め、智慧と人格の完成によって、自他ともに人間の尊厳に目覚めるという形で提唱された。それは「権利の平等」というよりも、「精神的・宗教的な意味での平等」であった。それが、近代西洋の観念と異なる点である。」